

## 新スマートシティ論 (5)

# 欧州、分野横断の基盤整備

欧州のスマートシティの特徴として、分野横断のプラットフォーム（基盤）を整備し、都市問題の総合的な解決を目指す事例が多いことが挙げられる。

スペインの都市バルセロナでは2000年から新産業・イノベーション創出のためにスマートシティプロジェクトを始めた。同市では11年から世界最大級のスマートシティ展示会「SC EWC」を開催するなどスマートシティの普及・発信にも注力している。

同市の取り組みは、街中に張り巡らせたセンサーからのデータを集約するデータプラットフォーム「センティエロ」が支える。そのデータを活用することで、様々な都市機能を効率化している。例えば、公園の気温・湿度などのデータを基に、散水や噴水を自動的に調整する「スマートウォーター」、ごみ箱が満杯かどうかなどのデータを基に収集ルートを設定し、効率的に収集する取り組みなど。

なお、データプラットフォーム「センティエロ」はオープンソース（ある条件下で使用や改良が自由なソフト）として公開し、スマートシティの取り組みを目指す

### スマートシティを支えるプラットフォーム例

バルセロナ「センティエロ」
街中のセンサーから集めた情報を集約するネットワーク
アムステルダム「アムステルダム・スマートシティ」
スマートシティの実行者やプロジェクトを統括する組織
コペンハーゲン「DOLL」
照明を中心として技術開発や実証実験ができる場の提供

世界中の公共団体・機関に対し、無償で提供している。

オランダの首都アムステルダムでは、二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）削減を目的に09年からスマートシティの取り組みを進めている。スマートメーターを各家庭・商業施設に設置し、省エネ化を推進する環境配慮型の取り組みを中心に実施している。

これらの関連プロジェクトの実施にあたっては産官学と市民から成る団体「アムステルダム・スマートシティ」がプラットフォームの役割を果たしている。関係者のマッチングやプロジェクトの管理・統括の役割を担っている。

幸福度が高い国として知られるデンマークの首都コペンハーゲンでも、25年にカーボンニュートラル（炭素中立）な都市になる目標を12年に発表し、主に環境配慮型の取り組みを進めている。

同市では「デンマーク街灯ラボ（DOLL）」を13年に設立した。照明業者が技術を紹介できるよう公園を開放しており、世界中の最新の都市照明システムを見ることが出来る。照明以外にも駐車場誘導システムや環境モニタリングなど、様々なスマートシティ関連システムを日常生活の中で実証実験しながら開発する「リビングラボ」の役割を果たしている。

このように欧州の都市では、複数の分野の課題に横断的に対応するプラットフォームを整備し、総合的なまちづくりを通じて人々の幸福度を高めるスマートシティの取り組みを展開している。日本でも協議会などの組織がプラットフォームとなり、総合的なまちづくりを進める自治体も出てきており、今後ますます事例が増えていくことが望まれる。